

# 大正

# 道

第拾四卷  
第六號

二月十號

世界平和の精神的基礎

■絕對不二の教機——「正信偈」講話

■人生抵抗の剿絶と無抵抗主義の誤謬

## 世界平和の精神的基礎

○世界平和の問題は、講和會議上の事實として、討議實現するゝの氣運となつた。從來國際問題に於ては、道德正義の觀念よりも、利害得失の點より合從連衡を講ずることを主としたりしが、今や進みて國際問題を、人道正義の基礎の上に立ちて解決せんと欲する精神が、世界に漲りつゝあるは、實に會心の快事と言はなければならぬ。

○夫にも拘はらず、一面には猶各國提議主張の間に、矛盾衝突を來たさんかとの杞憂なしとは言へぬ。既にカイゼルの處置に關して英佛と米國と全然一致せざるかの疑あり、アドリヤチツク海の問題につきて、佛伊の間に意見の相違あるらしく、海洋自由の問題が、其名の美なるが如く果して公平私なき主張なるか、人種宗教の區別を撇して、徹底的に人道主義を實現し得るや、

の結果として矛盾撞着を免れぬ。從來は獨逸といふ強敵に對して合從して當りたるも、今や進むて將來各國勢力の分野を割せんとする時に於ては、必ず各自の利益を主張するの慾望を捨つることあたはざるのみならず、知らず識らず正義公道の名を以て、各自の提議を主張するに至るであらう。是必しも自ら故意に爾するにあらざるも、人間自然の性情として然らしむるものである。

○此に於て吾人一步進みて精神的基礎に立入りて、各自主張の正義公道なるものに、反省すべき餘地あることを見出さなければならぬ。此點に於ては吾人は從來歐羅巴の思想及文化に於て懐らぬところあることを直言するものである。かく言ふこと自身が既に偏見に陥り安き言分なれども、併精神問題の實驗上、是ばかりは相對的思想を脱却して、超然たる公平なる立場にありて提言するものである。

○全體歐洲の思想及文化は、自我主張といふことは根

國際聯盟も最後の制裁は武力に訴ふるの止むべからざるか、殊に政治主義の如きは、結局各國各派の主張を固執するに終らざるか、數へ來れば實際上必ず幾多の難關の伏在潜存せるを認むることが出来る。

○一方には盛に人道主義の高調せらるゝにも拘らず、必ず其原因あらなければならぬ。是は恐くは人生問題の精神的基礎に於て不十分なる所あるが爲に、主張の美はしきにも拘らず、此の如き好ましからぬ結果を來す自然の成行となるのではないかと思ふ。

○然らば其精神的基礎といふは如何なる點なるかと言ふに、如何にも正義公道の主張は立派なれども、各自其立場と主義とを固執して、其提議を以て正義公道なりと固執することは自然なり。此に於て必然

本的基礎を爲して居る。是必しも歐洲のみならず、人間としての根本的罪惡である。生活として、思想として、自己を中心として立場を定むることは、免るゝことは能はざる點である。然れども歐洲の思想は此自我主張と正義觀念とが抱合して、益々此に馬力を加へることになる。現今俎上の魚となつて居る獨逸其物すらも、必ずや其思想の脈を脱しては居らぬ。全體カイゼルの野心が戰争の根本原因なるべけれど、併獨逸人自身が獨逸文化を以て、世界を統一することを以て使命と考へ、茲に宗教的信念と結合して、自己を以て正義なりと考へたことが、かくまで頑強に戦はしめたものに違ない。是れ他より見れば頗る勝手な熱を吹くものなれども、獨逸人自身はかく考へたであろう。何んとなればルーテルの宗教改革已來、獨逸民族の勃興と宗教心とは、相抱合して發達して居るのである。幽閉中のカイゼルは宗教的冥想に耽りつゝあるといふも、彼として

野心を満足することを得たならば、東洋に對しては必ずや彼が嘗て物したる諷刺畫の如く、新十字軍を起して、思ひ存分人種宗教の偏見を發揮して、黃禍征伐を企てたであらう。

○其點につきては英國人は確に偏見も少いし、眼孔も高いと言へる。併英國人が自我主張が少いのであると思ふたら大間違である。寧ろ、獨逸などが遼東還附の干涉などやりつゝある時に、人種宗教の異同など眼中に描かず、思ひ切つて日英同盟を結んだ所が、其利害を見るの鋭敏な所である。彼は此度も日英同盟の友誼によりて、日本の爲にも相當に働くかも知れぬ。されど自我主張をして、正義公道に殉するものと思ふたらば見當違ひである。佛國の輕快親しみ安き、度々日本陸軍の遠征を熱望したるにても分かり安きも、合縱連衡の爲には去就常なきやも知るべからず。米國は亦英國よりは自由なるべけれど、殊に此度はウキルソンがあまりに正義觀念に執着して、自己主張をなすべきは、

恐くは列國の頭痛の種であろう。而して正義なりと自信して、自己主張の非を自覺せざる精神的基礎の缺陷は、必ずや此方面に最も夥だしく表現さること、思ふ。

○此に至りて聖德太子十七憲法第十條は、最後の鐵案であると思ふ。曰く、人皆心あり、心各執るところあり、彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり、我必しも聖にあらず、彼必しも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ、是非の理、詎か能く定むべけん、相共に賢愚なること環の端なきが如しと。如何なるウキルソンも未だ此點には氣付かぬらしい。如何にも米國の立場として、ウキルソンの理想として、此度の如く主張することは最ものことである。併其正義其物が米國の爲に利益を主張して居ることにならぬか。民主主義の高調には一面思潮の大勢とは言へ、是亦自己の主義主張が參戰列國の内政にまで立入るの處なきか。一方此の如く理想を主張するだけ、果して人種宗教の偏見を全然

撤廢して、米國民をして國際的に人道正義を行はしむ

ることを得るか。抑々人間が自己の主張の下に精神的陥缺の伏在することを自覺せんば、決して世界平和の精神的基礎の鍵鑰を握つたとは言へぬ。

○全體此度の舞臺に於て、ウキルソンの偉いところは言ふまでもなく最後に參戰して、急に米國をして軍國的たらしめた點に存するのである。ウキルソンは正義人道を唱ふる點よりも、實際の參戰を以て之に武力を伴はしめたことが偉いのである。若し平和を高調し、正義を主唱する點ならば、寧ろブライアンの非戰主義の方が徹底して居るとも言ひ得るであろう。流石にウキルソンは空想を以て平和を實現すべからざることを透察して、猛然起て武力を以て實行したのである。此點に於て米國が軍國化して居るのである、民主主義を唱へながら、著しき統一主義に陥りて居るのである。吾人はウキルソンの實際的努力を多とすると共に、あまりに自己主張の弊を反省せざることを遺憾とするも

のである。

○此に至りて精神問題は信仰問題に移らなければならぬのである。自己を絕對に正義なりと自信して他を顧みざるの缺點は、必しも獨逸のみならず、歐洲文化に伴ふ思想上の缺陷である。此缺陷は此を悲憫和融せしめるるゝ信仰的滿足によりてのみ、自覺せしめるるゝものである。絕對無限の慈光の照耀によりて、我等が有限の相對善の燈火の光明を失ふものである。

○近頃原首相の談話として傳へらるゝ、將來の國際關係は道德的とならねばならぬといふことは、何人も言はんと欲することを說破したる名言である。然れども其道德の根本たる是非善惡に關して、必ずや各國見解を異にするであらう。是に於てや吾人は一步を進め、從來自我と正義とを抱合せしめて自己主張をなす道德宗教論では、結局爭鬭に終るであらう。爭鬭の結果は結局強食弱肉に終るであらうと杞憂するものであ

○此に於てや個人の信仰問題に於て、自己の罪惡を自覺して絶對の大悲に歸入する精神の轉換あるが如く、國家問題も國際問題も、此精神轉換の實驗より、必しも自國を正義なりと執着する謬見を去りて、人種宗教の區別なく、他國の立場を認むる精神的基礎を自覺する必要がある。即ち國際道德論より進めて、國際的信仰、國際的懺悔の精神轉換論を必要とする。

○親鸞聖人曰く、善惡の二つ總じても存知せざるなり、そのゆへは如來の御心に善しと思召すほどに知り通したらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡と思召すほどに知り通いたらばこそ、惡しきを知りたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ、念佛のみぞまことにて、おはしますとこそ仰せは候ひしか。又曰く、よしあしの文字をも知らぬ人はみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりかほは、おほそらごとのかたちなり。

### 近角常觀著

## 信仰問題

定價  
七拾五錢  
郵稅六錢

### 人生抵抗の剝絶と無抵抗主義の誤謬

#### 近角常觀

ことは無いのであるから。争ひ隔てるのは可かぬと考える故、そこで飽く迄争はず平和にゆく爲には、自然そういう風の考になつて來ざるをえぬのである。

#### 二 私の無抵抗は大抵抗であつた

常に言ふ如く、我々が自分が正しいと言つて、自分が正義なりといつて、自分を主張する限り人生に平和は現出せぬ。故に自分が人に譲りて、人に敗けて人と平和を保たうと、必ず大低の人が少し考へた時は、常識としてこの方に出來うとする。私も小供の時より、喧嘩する時は敗けるが勝ちだの教育を受け、自分の方から人に敗け、人に頭下げるも人と平和にやつて行かうと、斯く考えて居つたことである。これは所謂無抵抗主義といふ如き意味からではなかりしも、兎に角人の善し惡し言はずにやるで無ければ、事實平和に保たれぬから、そういう風に考へて居つたことである。これは今日の若干の理想ある青年は、皆なこの風の考であられやうと思ふ。青年諸君が人と争うて行つてよい位ならば、苦心せられる

○此の如く論ずる所以のもの、吾人は絶對に自己主張を撤廢せよと言ふにあらず、寧ろ人間は自己主張の止むべからざる罪惡を自覺して、徒に正義の名の下に、此缺陷の潜伏せることを反省せざるべからずと提唱するのである。是寧ろ各自の偏見を除去し、寛容の美德をもる世界平和の精神的基礎を確立すると謂ふべきである。吾人は我帝國の代表者及聯合國及米國代表者の、深く此に留意せられんことを切に望む次第である。

る考が出て來たかといふに、『自分はこれ程善くして、正しく仕て居る。それに自分がこれ程犠牲になつて居ることを人が認めて呉れぬ。これ程争はずにやつて居ることを人が見て呉れぬ』と、これになつて來たのである。これは私が本當にそれなら、何處迄も人に譲りて満足して行けさうなものであるに、妙なもので、一方に譲り争はずにすればする程、『俺は正しく仕て居る、善く仕て居る。これ程仕て居るに人が認めて呉れぬ。斯程に迄譲つて居るに、人が之に向つて争うて來るは、人が可かぬ』と、この考が人に譲り、犠牲的に仕て居る心底に起つて來たのである。

初めは敢て無抵抗主義とまでは思はぬも、自分は飽く迄争はず、自分を空しく仕て行く、——それで何處迄も遣る積りで、如何程無我にし、自分を捨てゝ行つても、やればやる程、『俺はこれ程犠牲になつて居る』この心が起つて來て、今迄の犠牲が忽ち形なしにされて仕まひ、茲實に今迄自分が無我に仕やうと思ふて居れば、居る丈け辛い處なのである。全體自分が犠牲になつて居るけれども、人が認めて呉れぬと言ふ。犠牲は

人が『俺は信者故人と争はぬ。俺は念佛稱へる故人と喧嘩せぬ、黙つて居る、頭下げて居る』と、或は形丈けはその通り行つて居ることはあるかも知れぬ。けれども自分の心中に立ち入つて見ると、表では立派に行つた姿して居るも、心では『我こそ從順に振舞つて居る、すなを行つて居る』と、この考で人に向つて居たのだとすると、その心は何だらうと申すのである。ちつとも人に譲つてるので無い、無抵抗に仕て居るので無い。『我こそはこんなに善く仕て居る』の考えが中心で、寧ろ頻りに『自分は善く仕て居る』と主張して居るのであるから、形は無抵抗でも、矢張り、無抵抗といふ一種の抵抗を仕て居ることになるのである。故に無抵抗は形では人と和ぐことになるかも知れぬも、心から無抵抗にはなり得ぬのである。人は抵抗を以て来るも、我は君子人でゆく』と——それなら我々は自分は善く仕て居るの根性故、我は善く仕てゆくの一大抵抗になりて、これでは何時迄たちても安心出來やう筈が無

人に認めて貰ひ度いやうなことで、犠牲などと言ひ得るか。犠牲は人が認める、認めぬなどてある可き筈がない。爾るに自分が犠牲を仕て居るを人が認めぬと、自分がそれ程人に譲つたことを人が認めぬと、忽ち不足が出て来るは、犠牲どころか、初めから『人に譲る』實は大に人に對して要求して居つた、我慢を主張して居つたことであつたのである。茲少しく複雑で、能く味つて頂かねば分らぬ處なのである。

### 三 無抵抗主義の誤謬

例へば今日言はれて居る無抵抗なることは、人が自分の利益を取つても、自分は黙つて取られて居ることを、無抵抗と言つて居るやうなのである。或は形は成る程然うであるかも知れぬ。けれど心中『私はこれ程人に譲りて居る、無抵抗に仕て居る』と、一念この心を持つたとすれば、それは本當に無抵抗に出来てゐる無いと申すのである。斯のやうのことは寧ろ通俗に言うた方が分りよい。能く信者の

#### いてないかと申すのである。

#### 四 蘭相如と廉頗

こは至りて簡単な問題である。殊に昨年來露獨の状態に就きて考て見ても、露西亞の方は武器を捨て軍備を撤して、戦ひの意志無しといふ如き無抵抗的態度で臨んだけれども、一方獨逸の方が好機乘すべしとして、どしき軍を進めて侵入してゆくとなると、一方武器を捨てゝ抵抗の仕て見やうなけれども、『あまりに非道い仕方である』——事實は何うか新聞ではレニンが抵抗しやうと言うたといふ話である。即ち絶対の無抵抗は人生に出來得ないといふが、茲のことである。又も一步緻密に考察すると、『我は無抵抗に仕て居る』との考は、却つて自分を高ぶり、人を見下して居る處の思想である。いつも言ふ、私が信仰前に經驗した思想で『信仰之餘瀝』にも書いてあるのであるが、昔趙の國に廉頗、藺相如の二人が重臣であつた。二人が勢力を争うて相戦へばそこに間隙が出来て、敵に乘ぜられて危いから、如何なることあつても仲よくせねばいかぬと、そこに着目した蘭相如は、自ら廉頗の下に身を屈

して、廉頗が如何なる態度で向はうと、いつも廉頗の下位に立ちて、無抵抗に出で居たといふのである。斯く蘭相如が無抵抗に仕て居た爲め、喧嘩好きの廉頗も喧嘩が出来なかつた。終に最後に至りて斯く蘭相如が身を屈して居たは、そういふ尊い考からてあることが分り、流石の廉頗も耻ぢ入つて蘭相如の許へ飛んで行き、舊來の暴状を慚謝して、刎頸の交を爲るやうになつたといふのである。私が考えたは『蘭相如の遣り方は偉い』。我々宗教の爲めにするのも、誰彼が善い悪い言うては可かぬ故、他人が如何にあらうが、自分の方は飽く迄献身的に、人に譲つて行かねばならぬ』と、私はこの考でやつて居つた者なのである。

## 五 『世の中に我は廉破だといふものが

處が常に言ふ如く、斯く蘭相如の潔白を理想として行くことになると、私の内心『私は蘭相如である、彼は廉頠である』と、この考が何うしても取れぬことになつて來たのである。成る程形では蘭相如の如く頭下げて人に譲つて居る體になつて居るけれども、腹中に何うしても融けぬものは、『我は蘭

は真直だけれども、お前の方が歪んで居るのだ』と言ふのであつて、全體何ちらが本當に真直であるのか分らぬ。故に自分の方より善く仕て行く無抵抗主義になると、『俺は善くして居るけれども、向うが／＼』といふ、この『けれども』が何處迄いつても残りて、而もやればやる程強く起つて来て、茲實に困る所となるのである。

## 六 トルストイは間違ひに陥つた

そこでこは今日は全體トルストイの無抵抗主義の誤謬について話す積りで斯ういふことになつたのであるが、そこでそのことは何處からでも言へるのであるが、先きいふ如く自分の方から無抵抗に出る露西亞風の行き方であると、それから来る結果の如何は別として、先づ言ふ如く眞に絶対に何處迄も無抵抗に行ひ得るか否かを考え無くてはならぬ。信仰からいふと即ちそれが罪惡觀の起る本である。我々思ふ如く何處迄も人に譲り、犠牲的に不足無くやれるのならば、それなら我々は罪惡生死の凡夫では無い。煩惱のなきやらんとあやしくさふらひなまし』の方である。それなら

相なり、彼は廉頠なり』故に如何程やりても『俺がこの如く損を仕て居るのが本當は偉いのである、敗けるが眞實の勝ちなのだ』と、これになりて、故に一方も何うしても頭を下げて來ぬのである。何か自分ばかりが蘭相如顔して相手に向ふから、相手も何うしても和いて呉れぬと、斯くなつて來たのである。これは注意せぬと我々宗敎などに心懸けると、直ぐ何か人より偉い者になつた積りになり、『アンあの男は無宗教だ、我々信仰を持つ者は』など、妙に鼻息が荒いことになる。信者の人などに能く之がある。『我々佛が無くば喧嘩する處であるも、せぬ。併しあの男も分らぬ奴だ』と、之が出るはそらいふ偉い者になつた積りで居るからである。そこで私氣の附いて來たことは、『これは全體俺が蘭相如だ／＼と言うてるのが第一に悪い。誰だつて世の中に我は廉頠だと言ふ者があるものか』と。——茲は常に捧が一本へ形にある。如き有様だと申す處である。一方からは一方を眺めて、『自分は真直だけれど、向ふが歪んで居る』斯く言ふのであるけれども、一方からは『イヤ俺も茲に矛盾がある。私はトルストイの間違ひは茲に在る。勿論トルストイの無抵抗主義なる思はは一代の福音であつて、私はそれを軽くは思はぬ。又ト翁がそれを宣傳するには、それ丈けの心的狀態を經驗してのことだと私は認めて居るのである。けれどもトルストイの教える處には何うして此の世ながら佛の如くあり得る人である。故に私から言ふと

ト翁自身はその狀態を経験したにせよ、それかと設しト翁自身はその狀態を経験したにせよ、それかと言つて直ぐ夫れを持ち代えて格言と爲し、故に人々その如くせよと人に勧めた處はいかぬと思ふのである。ト翁自身は或實驗の結果それを體験したとするも、故に人にもその如くあれと人に求めた處は重さある自分の體を自身で上げよと言ふたと同然で、元來出來得ぬことであるのである。我々自己の身體の有る限り、自己を滅して飽く迄無抵抗になれと云ふことは、本來なり得ぬ註文であるのである。私はちと激しく申したのであるも、併し私自身はこれ一つで長く苦しんだのであつて、私の入信はこの一點で行き詰つたのであるから、こゝは吳々

もよく味つて頂き度い所である。

### 七 『敵を愛せよ』の如きも矛盾なり

要らぬことなれども、先乍

『無我の愛』なるものが唱導せられたことがあつた。あれは多少トルストイ主義を経験した結果の如くてあつたが、言ふ所は自己を捨て、無我に他を愛せよといふとてあつた。而して現に夫れを聞いて病氣快癒したといふ人が有つた程だつたし、又言ふ人も若干實驗があつて言ふたものと考えて見るも、併し結局の處は我々何うしても本當には無我になり得ぬといふ所で仆れて仕まつたやうであつた。こはも一つ言へば彼の『敵を愛せよ』といふことの如きも、實に善き教えである。併し事實に言ふと、人を敵と視た時は、や既に「愛する」はされなくなつて居るのである。はや既に敵と視たことが、我に異見を抱ける者とか、我を迫害する者とか、然うした考が既に人を敵視して居るのであつて、而もその上に猶ほ愛せよといふた處が、それは、唯心に無理な苦しみを重ねるばかりのことになつて仕舞ふのである。要するに如何程せんとするも、無抵抗といふことは出來得ぬ

ことであることを申したのである。

### 八 真解決の道は如何

處て無抵抗が出来得ぬ支けを申すが目的で無い。肝腎はトルストイの批評でなくして、信仰の問題である。我々斯く如何にするも争ひを免れぬ五分々々の人間が、如何にして争ひより脱却するか、安心するかの問題である。以上申す如く我々は如何にするも無抵抗は行へぬ。設し形で争はぬにしても、心ては何處迄も自己の主張を免れぬとすれば、結局同じ争ひの苦みである。すると玆を何處で解決して救はれるか、之を申さねば何にもならぬのである。

### 九 「自分が悪い」だけに了つては無抵抗主義になる

こは大分思想問題的な言ひ方になつたが、信者の方にも聴いて頂かねならぬのであるが、甚だ露骨であるけれども、兎角信者の人の間には、心に善し惡しの抵抗起して居ながら、それを案外氣に止めぬ人があるやうなのである。一つは眞宗を聞きぞこなうとそれになり易い。何故なれば從來

に氣附いて喜ばれた人があつた。即ち斯う言ふて居るのが今の無抵抗に、不知不識出て居るものなのである。

### 一〇 無抵抗を信仰的態度と誤解して

#### 居る人

處が、そこ迄はまだ氣が附くのであるが、そこで行き止まつて仕まふのが信者の人には甚だ數多いのである。併し初めの氣に止めぬのに比べると、茲まで行つたのは餘程近くなつたのである。もとは人が善い悪いと人の善し惡し言うて居た人間が、「イヤ人に喜ばれやうと思うて居た自分が悪つた」と、頭下つたのであるから、即ち他であるから見ると甚だ感心な人とはなつて来る。成る程併し他から見ると甚だ感心な人とはなつて来る。だから何程報はれなくても「自分の方が悪いのだ」と言うて居るのだから、非常に結構な事とはなつて来る。併して何處に解決が着いてゐるか、考えなくてはならぬはそこである。こは我々自分が悪かつたと氣がついて、何處迄も人に下手に行かう、無抵抗に仕やうとなつた時よく有り易いこと。よくこれ迄氣強くやつ

・眞宗の勧め方に「悪しくてもよい、淺間じくても構はないのだ」の誤がありて、悪しさは止まぬのだと言ふもの故、有つてもよいのだと、平氣で争ひをして居る人があるやうに見受けるのである。こは固より論にならぬ側であるが、併し氣を附け無くてはならぬは、信者に限らず兎角「自分がよい、人が悪い」と思ふのが可かぬの故入を悪しく思ふた自分が悪かつたと、それだけで止まつて居る人があることである。而してうつかりするとそれで分つた積りで、そう言ふて居るのが不徹底の状態であることに気がつくことが六づかしいのである。先年私の話を聞いて下された或人が、「自分の近しき者に色々と世話してやつても、向うが有難いと感謝せぬ。然ういふ時以前はこれ程善く仕てやつても感謝せぬは向うが可かぬと思うたが、段々聞いて見ると人に世話して、先方が有難く思はぬからとて可かぬと思うた自分が悪かつた。人を世話するに何も先方に善く思つて貰ひ度い爲めにするので無い。向うが善く思はぬからとて不足に言ふ位なら、初めからせぬ方がよいのである。之は大なる間違ひであつた」と、これ

て居た人が信仰を聞いて、「これは今迄自分の方が悪るかつた」となると、隨分周囲の者が自分に對して失敬な事をする。或は自分の仕た事を悪しく取つて色々とやる。何程向うが悪しく遣らうとも、それに飽く迄善く仕て行くのが信仰の姿だと、それでやつてある人があるのである。而して然う言うてその實よけい苦みを仕て居るとなつて居るのである。而して夫れ等の人が毎に私に言はれるには、『何うも貴方の信仰の姿では無いやうに思ふ』と——即ち浮つかりすると『無抵抗がよい、黙つて居るのが本當である』と、それで遣つて居るのだと之になる。一つ間違ふと昨年來の露國の崩壊は然ういふことでもあるまいけれども、それでやつて居るのだとすると、確にそれになり易き傾きがある。全體レニン、ツロツキイはあくいふことを仕て何う思うてるか。動もすればあの如き屈辱をして、『イヤ偉い事をやつた』と得意の氣味で居るて無いか。それはまださもあらうとして、それで本當に無抵抗で通せるならよけれども、

へて、『彼の人は親切な人』と、何も形の上の報酬は受取らぬも、心でちやんとの報酬をとりて居る。としながら皆な氣づかずに居るのである。

### 一一 善い事で苦しんで求めて來られる人

故に隨分善い事で苦しんで聽きに來て下さる方がある。現に茲に聽きに來て下さる或方、日露戰爭の時最初から、最後の奉天戰迄戰争して、終に最後の戰争で傷つき倒れ、萬死に一生を得て、辛じて生き歸つて來られた方である。その方が凱旋後戰地に在りし時に部下兵卒との間に交はした誓約を重じ、色々に廢兵遣族救護事業に盡力して、終にその爲め煩悶して聽きに來て下されたのであつた。私その時その方に申したには『失禮ながら貴君、然ういふ救恤事業の爲に犠牲になつたと言はるゝも、それは本當に犠牲になつたので無い。今貴君の苦しんで居らるゝは、即ち貴君の心に「自分は國の爲めに是れ程した、是れ程善く仕た／＼」の考えがありて、夫れ程善く仕たのにその自分が立て無くなつたのだから、それで貴君は苦しんで居られるのである。第一この善く仕た／＼の考が甚だ可かぬで無いか」と、之を申

したらその方は非常に驚かれたのであつた。『成る程言はれて見ると自分は出征の時に、自分は戦死してもよい。併し死ぬても國家の救護がある故妻子には困らぬと、この考があつた。第一之を思ふたのが、口には皇國の爲め／＼と言ひながらも、その實利益主義でやつて居つたのであつた。成る程言はれて見れば自分自身がそういうふ自性で居りながら、今迄自分が善く仕て居る／＼と、之を思うて居つたが悪かつた』と、そこに大に氣附いて下されたのであつた。即ちそこに居らるゝ橋地氏がその方である。最後の戰争で頭部に貫通銃創を受け、戰死者の中に數えられてあつた程の人が、從卒の親切で漸く生き返り、死んだ積りで廢兵の爲に盡くさう／＼と、終に自分の立てなくなつたと思うて居らるゝのが可かぬ、本當にやれどは居ぬではないか』と、そこ迄言はなければ分らぬ。又それが若し本當に遣れる位なら佛は入らぬことになつて仕まゝのである。

故に親鸞聖人は

疑心の善人といふことを言うて居られる。善人は善人なれども疑心の善人、疑ひ心の善人であるとのことを言はれてある。即ち絶対に佛を疑ひて佛を認めず、我こそは絶體である。即ち絶對に佛を疑ひて佛を認めたる處の善人である。そこで行くと信仰上龍樹天親といふ如き大乘の聖者と雖、我こそ善者なりとの考がある限り、眞の善人で無いといふのが、聖人の思召である。すると善きことなれば善き事に就け、私は仕たとの考が遺りて何うしても抵抗が止まぬ。——全體救ひは悪しきことにはかりにあるので無い、善きことでもあるのである。親が親心の上から自分の子供を哀れ救ひ度い。子は子で親に心配させていとしいと、抵抗仕て居るものなのである。即ち善いことで言ふと、世間の善いといふことが皆な之の通り、故に善い事が皆な罪である。イヤ彼の男は益暮に贈物を持ちて来る。好い男故あれに良く仕て遣らう』と、抑々世の中の因果應報、流轉苦惱の源は、この人生相對の善いが本なのである。それは佛教上色々の言ひ方もあるも、我々の心の上では

親鸞聖人は常に善惡々々といふことを言うておいでになつてある。『歎異鈔』末文には

聖人の仰せには、善惡の二つ總じてもつて存知せざるなり。云々。

惡の方は咎めてよいかも知れぬも、善の方は左程咎めるにも當らぬやうであるも、今の如く我々の善は、善が惡と同じに罪なのだから、何處迄も言はなければならぬ。人を世話して禮言はれぬと不愉快を感じるは、初め好意で盡して置きながらひどいことだと言はれたのであるも、その人は禮言はれて喜ぶ方も罪であることは思は無いで居られたのである。それは言はれて喜ぶ丈け、言はれぬと不足が出るの故、茲になると我々の善惡は、善も惡も罪である。故に聖人は善惡二業のことと言はれて、善も業の方に入れられてある。世間的には惡は可かぬ善はよいと、世間相對の善を探り上げるのであるも、善惡は斯く此方の心に在るの故、善を取上げる限り惡も取上げなければならぬ筈である。そこになると惡の可かぬ限り、善も又いかぬ。こは私の苦しんだ時は善も惡も皆な抵抗となつて、私の心を隔てさせばかし

善いことされて善くするから、悪しくされると悪しく仕度くなる。即ち何處迄も善し惡しが自分に附いて廻はりて脱れられぬ。故に普通に言ふ處の世間の善いが皆な迷ひの種因である。毎も言ふことであるも、新聞は悪口書くのを我々罪だといふて居る。反対に褒められた時は気持ちが好い。この気持ちが好いが、悪しく言はれて悪いと同じである。それを善く言ふ方はよいが、悪しく言ふ方は可かぬといふて居るのであるも、ナニ何れも同じ五分と五分とである。善く書かれて喜ぶ人間故、悪しく言はれると腹立てるとなつて来るのである。又互に慣れ合ひ妥協して褒め合つて居るも罪である。この點より言ふ時は政府が政友會を引張つて居るも罪、憲政會を罵つて居るも矢張り同じ罪である。そこに行くと我々、善いとか悪いとかを唯一標準として平日生活して居るのであるが、その善し惡しの附いて廻はる限り、何處迄も抵抗の生活と、斯ういふことになつて来るのである。

### 一三 善惡同罪なり

故に

十になつて仕まつたのであつた。そこになると我々が一寸の事で悲み、一寸のことで喜ぶ、之が皆な抵抗と斯ういふことになつて來るのである。さて之で我々抵抗の離れられぬ迄は分つた。その抵抗の罪深き私が、爾らば何處で安心するか。抵抗の文字を換へれば佛教の五逆十惡で申してもよいのである。我々は口にも言葉にも懸けられぬ五逆十惡の身の上であるといふ。それは親を殺し佛身より血を流す五逆十惡は我々せぬやうであるも、現に親に抵抗し不足をいふて居る處の我々である。即ち五逆十惡は、以上申す處の我々の善惡は、残らずが皆な抵抗であるといふ處の實際から考えて行けば能く分る。殺生戒は何も形で生物を殺すばかりが自分は正義ぢやといふて、飽く迄周圍を無し自己を押し立てゝ行くも殺生である。するとその如き五逆十惡の私が如何にすれば救はれるか。如何程苦心しても無抵抗になりて安心する道は有り得ぬとすれば、その者が何處で救はれるか、之が肝腎の問題となるのである。

#### 一四 私の最後に氣のついた事は

するとその時に私が最後に安心を得た筋道を言ふと、『自分はこれ迄人に隔てぬやうに仕やう、打ち融けるやうに仕やう、我慢張らぬやうに仕やうと、様々思つたのであるも、結局斯くやればやる程我慢深く、名譽心深く、執念深い人間であつて仕まつた。こんな恐ろしい心で人に向へば、如何な無我の人もあんならにはこり／＼だと呆れられて仕まつて有らう』と、私はこの自分の絶對我慢の性分一つで行きついて仕まつたのである。故に私は飽く迄我慢で遣り貫す獨逸主義も感心せぬ。獨逸のはそれが何んな具合にあるのか、信者の人が『淺間しくてもお助けてある。人間は生きてる限り惡は止まぬのぢや』と平氣で惡を打出して安心してゐるも同じだと思ふのである。我々それが平氣で出来る程ならば、初めから人生問題に苦心はせぬ。願はくばその我慢を無く仕度いと思へばこそ苦心するの故、悪い儘で安心出来やう筈は無いのである。爾らばその惡が止められるか、止められ無い。そこで

る自分は正しいのであるけれども人が悪いと、——一度之から向ふ寒さの氣候のやうに、外界に雪が降り寒風が吹く。故にその爲め自分の身も冷え、この通り冷めたく、疑ひ深くされて仕まつたのは、之は外界に於ける風雪の精である。少し温い春風があるならば斯うなるまいに、この人生何處を眺めても氷や雪ばかりである故、この通り自分も寒くされて仕まつたと、これは我々外界に病氣、災難、境遇、然ういふ冷いものがあるが爲に寒いと誰しも言うて居るのである。それは成る程外界に於ける雪が融けねば、風が止まねばを言うて居るなら信仰問題では無いのである。成る程原因は外界の風雪にもあらう、がその爲め閉ざれて自分の身が既に冷たくなつて仕まつたとすれば、それは既に自分の身が雪になり、氷になつて仕まつて居るのである。故に冷却された水の身、雪の自身を如何にすべきかの問題が既に自身について仕まつて居るのである。爾るにそれを忘れて

最後に私の氣の附いたことは、『自分がこんな淺間しき心で人に向へば必ず呆れられ、見捨てられて仕まつては永劫に安心の有りやう筈が無い。哀はれ世の中に誰か一人この執念深い自分なることを見て呉るゝ者ありて、そのやうな争ひ深い、隔て深い性分なることを理解仕て呉るゝ者ありて、自分がこれ程の隔て根性で向ひても、然ういふ性分が氣の毒故、如何に汝の方から隔てても我の方からは隔てぬぞ。然ういふ汝を可かぬとは言はぬぞと、自分の方からは性分故何處迄も反抗するが、その反抗の止ぬのが可哀相故、その汝に我の方からは飽く迄無我で向ふぞと、この無抵抗を以て自分に向つて呉るゝ者はあるまいか』と茲で話がコロリと一轉するの故、茲を能く氣を附けて頂かなくてはならぬのである。

#### 一五 外界の風雪の問題に非ず、冷却處で私の初め苦しんだは、私と人との關係であつた故、私の心持ちに於ては、寧せる自己の問題也

皆なが境遇が悪い、人が悪いと、それは成る程人も境遇も悪いのであるかも知れぬ。併しその爲め冷やされ、凍えついで仕まつて居る自身は、自分が氷、自分が雪、故にその自分が触るれば如何な無我人も、あれ冷いと遁げて仕まはれるに決まつてると、問題はそこに出で仕まつて居るの故、こゝ大に注意仕なくてはならぬ處なのである。それは或は外界も悪いかも知れぬが、その爲め冷やされ、凝結させられ、抵抗性で塊めさせられて仕まつた自分であることが分ると、その抵抗性の自分が行く處、如何なる者も呆れ果て、面をそむけて遁げはれるか。茲になりて問題は外界の風雪を取り除く問題に非ず、その爲め冷やされ凝結した自分が如何にすれば平安になれるか、救ははれるか。茲になりて初めて自身の問題となるのだから、茲に留意しなくてはならぬのである。

#### 一六 大悲は自己の問題が捨て置かれず

これは皆様が色々の苦みを提起してお尋ね下さる場合

に、私成る程それはそういふ境遇に立たれては、成る程貴方殘念に思はれるであらう。御最である云々と、斯く私の方より御同情申上ぐるは、それは外界に横はある風雪の問題を申して居るのでは無い。その爲め冷やされ、つめたくされて仕まつたその方御自身のことを申上げて居るのである。猶ほ申せばその冷やされた寒い心で人に向へば、今度は此方が人を寒がらし、凍えさせて仕まふに決つて居るのである。故にこんな心で人に觸れば、人が觸つて呉れるなと言ふに決つて居ると、それで人生に行き處が無くなつて居る御同様である。そこへ『そらなつたのが氣の毒のことである。成る程そのこじくれた性分では人に嫌はれるであらうが、そういうふ嫌はれる冷い根性となり果てた處が同情に堪えぬ。よしその汝のその冷たきを何處迄も捨てぬぞ、同情するぞ、その汝の冷めたい限り何處迄も温めなくては措かぬが我なるぞ』と、斯く私の冷き、寒き所に同情を持つて下されたが、今お慈悲の問題なのである。こは嘗つて或る勝氣の方が四方八面より迫害を受け、上よりも下よりも壓迫せられて、おまけに人のした咎まで自分

がある。

### 一七 無限大の數を加えらるゝ

茲になると大悲の同情は實に積極的である。人生は消極、——我々の無抵抗は無抵抗にする迄が抵抗故、消極でマイナスばかり、マイナスに何を掛けても結局何處迄もマイナスである。我々外界の雪や氷を除かうと、扱えば扱ふ程彌々凍えるばかり、温りは毫厘も出ぬの故、何處迄も雪や氷の冷かな人生である。それ故その爲め冷えきつて仕まつた汝自身が可哀相故、汝が如何に冷酷であらうが、我慢張らうが、抵抗仕やうが、そうあればある程その汝が彌々哀はれと、そこえ無限絶大の數を加え來らるゝ、茲が最も分り難き所なのである。こゝは『斯ういふ者をお助け』と、唯空實際にその御眞實を注がれるので無くては。これは皆さんが我慢が止まぬと苦まれるのに對し、私が佛に代はりて『それが何うしても止み難いであらう、そういうふことが思はれるであらう、お察しをする、御最である』

が被らねばならぬ事になり、『殘念ながら頭下げて誰彼に謝罪らう』と、心冷たく獨り道を歸つて來られた處に、丁度雪の時分で、雪道の所に一人の乞食の子供が立つて居た。見ると傍に雪合戦して遊んで居る大勢の町の子供が、皆んなで乞食の子供に雪玉をぶつけて意地めて居る。乞食の子供は大勢で意地められて泣いて居る。道の左右には戸の開いて居る家もあるも、誰も乞食の子供を助けてやらうといふ様子も無い。その方『あゝ可哀相なことだ』と眺められたが『あゝこれが人ごとて無い、自分の今日の身の上である、自分が今世間から意地められて居るのがこの様だ』と、斯う思うて居らるゝ處に、何處からともなく、母と覺しき者がそこへ現はれたが、見るなり『サア來い』——聲かけるなり乞食の小供は大聲立てて母親の懷に躍り上つて喜んだ。その方『あゝ自分が今これである。自分が敗けぬ氣強く人に手向ひする爲め、誰も相手に仕て呉れぬ。こゝへ大悲の親は、斯うなつた自分を辛からう冷たからう、心配するな、案するな、我能く汝を護らんとは、茲をかねて見てやらうとの御慈悲であつたか』と、これで圖ず知らして貰はれた實話

と御同情申上げる。處がそこに面白きは、皆様の方では外界の總てが雪、氷故、その爲め冷え切つて仕まつた心では、誰が何と言はふと嬉しいとは思へぬ、満足とは思はれぬ。處が此方はその冷え切つた身體故、誰の前に持ち出しても満腹出来ざる、愚癡の止まざる『そこを見て遣ると言ふのである』と、茲初めは人生と私との問題であると所へ、思ひ懸け無くヒヨコンと慈悲で救ひ取られるの故、茲を餘程氣をつけなくてはならぬのである。

### 一八 無限大悲の眞實とは

昔から傳へる話に、親鸞聖人が日野左衛門の門前で行き暮れて、一夜の宿を請はれたけれども、主人の心堅貪にして聖人を寄せつけ無つた。真宗では名高い雪を夢に石を枕に御苦勞の話である。附いて居た蓮位、西佛の一弟子が、これ程辭を低くして頼んでも應ぜぬとは言語同断と、仕方なくその夜は門前でお明しになることになつた。すると風は彌々つのり、雪は益々積る。二弟子は聖人の御苦惱をお察して、歎き悲む。その時それ程寒くさせられた聖人が仰せられた御言葉として傳へる處に

てやるぞ、そこを哀はれに思ふのだぞ』と、然ういふ者に無限大悲の心で何處へ迄も遺る瀬無く言うて下さるといふ、そういう御眞實にてましますのである。

### 一九 同情は相手の『冷』の爲に一點その温を減殺せらざるもの、

彌陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

即ち『この冷かな、斯く冷遇せらるゝ、この寒くつめたい親鸞一人の心を御覧なされ、このそくばくの業を持ちける身にてありけるを、之を哀はれ見てやらうと思ひ立ちて下された御眞實の添なさよ』と、即ち私は此見て下さる御眞實者に遇ひ奉つたのであつた。私などそれ迄自分がこれ程仕たのに人が見て呉れぬと不足起し、最後にはこれ程迄仕て認められぬ人生では、敢て人の下敷きになつて減び行く自分の一身は恨まぬが、之では世の中が成り立たぬ。斯ういふことが行はれる人生では、設ひ死んでも冥するこどが出来ぬ』と、死んで死ぬ、化けて出る程の思ひて居たのである。爾るにその心に向はせられ『それは無理無い、同情する、察するぞ』と、昔の小説に能く幽靈が毎晩迷うて出て、恨みごと言つたといふ話があるが、そのやうに思ひ切れぬ、殘念な、我慢な、迷うて出ぬならぬ、その冷たい心を大悲の思ひ遣る瀬無く、『察するぞ、見

犯して監獄へ行く。行つた爲に前科者となり、段々世の中を冷に考へるやうになり、誰も自分の事を悪しく思つて居る、彼も思つて居ると、終に世の中全體を疑ひ隔て、仇取つて考へて仕まふやうになる。そこへ一人同情者があつて、同情仕で呉れても、常人は同情されたと思うて居らぬ。彼奴可笑しな奴だなど、屹度冷かて出て来るに決つて居るのである。てこの時一方が、何んだ折角同情してやつても、そんなならせぬぞと引込んで仕まふのなら、同情にならぬ。同情は『あゝあんな人間で無つたけれども不幸あゝいふ氣の毒な身の上になり、すつかり心の根底から冷え切つて仕まつたものだから、人見れば仇どる、あゝいふ性分になつたのだ。それ故自分は如何に汝が我に振舞はうが、そくなつたを氣の毒とこそ同情され一點悪しくは思はぬ』と、一方は氷て向うのに、その者に一方は飽く迄温情で向つて來て呉れる眞實である。即ち同情の眞實の方は、一方の氷である爲に一點減殺さる處が無い。茲が皆さんが最もお聞き取り難い處なのである。

例えば青年の方が言葉にこそ出されぬが、『何うも先生喜べませぬ』と訴へらるゝに對し、『私は喜べぬ筈ぢや、此方は冷いのだもの。何故又そんなに喜ばねばならぬのか』と斯く申上ると、そこに皆様が無意識に『喜ばぬ』と呆れられて仕まふ。この思想が隠れて居るのである。『何故呆れられて仕まふか』『佛よりはそれ程眞實で仕て下さるのに、此方が有難いと受けられぬては可かぬ、受けられぬと呆れられて仕舞まふ』と、之になつて居るのである。即ち私共監獄を出た囚人で、心が冷え切つて居るもの故、『俺のやうなもの屹度人が呆れるに決つて居る』『イヤ彼も俺を泥棒と思ふと/orに決つて居る』と、此方が總てこの冷さて、人を敵どつて懸つて行くの故、我々の赴く處、行く處益々悪しくはならうとも、良くなりやうは無くなつて居るのである。即ち折角親切て向て来て呉れる人をも、此方から斯く冷やして仕まふのだから。處がこの時この者に對し『イヤイヤ汝のその冷かになつたそこに同情を持つのである。汝が風

### 二〇 五劫永劫の御苦勞の意義

犯して監獄へ行く。行つた爲に前科者となり、段々世の中を冷に考へるやうになり、誰も自分の事を悪しく思つて居る、彼も思つて居ると、終に世の中全體を疑ひ隔て、仇取つて考へて仕まふやうになる。そこへ一人同情者があつて、同情仕で呉れても、常人は同情されたと思うて居らぬ。彼奴可笑しな奴だなど、屹度冷かて出て来るに決つて居るのである。てこの時一方が、何んだ折角同情してやつても、そんなならせぬぞと引込んで仕まふのなら、同情にならぬ。同情は『あゝあんな人間で無つたけれども不幸あゝいふ氣の毒な身の上になり、すつかり心の根底から冷え切つて仕まつたものだから、人見れば仇どる、あゝいふ性分になつたのだ。それ故自分は如何に汝が我に振舞はうが、そくなつたを氣の毒とこそ同情され一點悪しくは思はぬ』と、一方は氷て向うのに、その者に一方は飽く迄温情で向つて來て呉れる眞實である。即ち同情の眞實の方は、一方の氷である爲に一點減殺さる處が無い。茲が皆さんが最もお聞き取り難い處なのである。

雪に冷やされて、つめたくなつたそこに同情を持つといふ上は、汝がその冷え切つて仕まつた爲め人の同情が心よく受けられぬ。その受けられぬ處に同情するといふの故、汝が如何に疑は

ふが刃向はうが、それを一點悪しくは思はぬ、益々その刃向う處に此方から温にする』と、即ち此方から眞實同情で向へば向うも有難うと受けやうと、そう思はれるのであるけれども、向うは冷え切つて人の温みを温く感する力を喪失して居る人間であるから、何程同情し何程親切にしても、向うは何處迄も有難うと受けぬ、満足とはならぬ。爾るに此方は其のなれ無い處が彌々氣の毒と、然うあればある程そこが捨て置かれた眞實であれば、それをするには佛の五劫永劫の苦勞といふことを我々易いことに思ひ易いのであるけれども、何うしても、我々絶對の抵抗性に無限の無抵抗を以て忍んで、下さる眞實が、五劫永劫の御苦勞といふことなのである。即ち之が無碍といふことにて、無碍とは大悲の心の故に、如何なる惡も碍になら無い。

満足、無碍と、こゝになると無碍の言葉が空で無い。爾るに私の考では、他方真宗の教が廣く行はれてる御合に、茲を自身の自覺として實驗して居る人が少いやうである。聖人は圓融圓滿、頓極頓速。圓頓の文字に註をせられて圓は圓融圓滿に名く。頓は頓極頓速に名く。(愚禿鈔) 即ち『私の水の有らん限り飽く迄融かして仕舞はねば措かぬ』この思ひ懸け無き眞實の温みに遇へば、如何な私の冷かさ、惡しさも頓極頓速と一時に殘らずその御眞實の程に融かされ、圓融圓滿満足無碍と。併し茲の處は猶ほ申さなければならぬのである。

## 二 抵抗性を取り上げられる一念

それ故失禮なれども皆様がよく私の所へ御出下され、『どうも人に不足が起つて困ります。人にひどい事されたのが忘れられて困ります』それに言はれるに對して私は無理ない、その抵抗の止まぬのは無理無い。その止まぬ仕やうのない處を見て下されたのが慈悲である。そこを見て遣らうといふ者は人生に一人も無い。爾るにその仕て見やうなき、そこを御覽下され、そこを何處まで見てやるぞとの御眞實である

といふことである。『歎異鈔』一章には

本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に。惡をもおそるべからず、本願を

さまたぐほどに惡なきが故に。

之が浮つかりすると『惡しくてもよい』になり易いのであるけれども、爾らず惡をもおそるべからずとは、その廣大の眞實であるから、惡を氣にせなどの意味である。向ふが何程廣大の同情で向うて下されても、我々此方が冷え切つた人間故、此方の冷かさの爲め向ふの同情が妨げられるのでは慈悲にならぬ。故に如何なる惡にも妨げられず、何處々迄もその惡なる處を見て遣らうとの廣大の慈悲なれば、我々の如何なる惡を以ても碍えることが出来ぬ處の偉大なる御心である。故に私共一度びこれに遇へば、如何な有碍の抵抗性の私も、心底から思召の程に恐入つて有難やと、初めてその御眞實の程が知られて貰へるとなるのである。即ち他方の徹底は茲で出て來るのである。實例に就て言へば皆様がお子さんを失はれた時、私は何う申上げるか。『貴方お子さんを失はれて嘸殘念ならん。若し助けられるものならば貴方は全財産を投げ出し、一切を犠牲にしても助け度いと思はれるであらう。それ程に思うて見ても何とも償うて見やうの無い貴方の心中は、無限の暗黒無限の失望であらう。その底の知れぬ暗黒、失望を哀み思召し、察するぞ見てやるぞ、その仕て見やうの無い暗黒の汝故、汝が暗黒の限り何處迄も見捨てられぬとある眞實が大悲の仰せてある』と。即ち茲は私共人間最終の苦惱、抜き差しならぬその仕て見やう無きを擗えて、そこを御見捨て無き御眞實であることを申上げなければならぬのである。私なども茲になると斯れ一つが分ら無かつた爲め得られ無つたのであつた。それは『これ程に思うて見てもこの我慢が止め隔てが止まぬ。この止まぬのが可かぬのだから、これまで取れれば人生はよからうに』と、即ち

私の方は何とかすれば無抵抗に出来る氣で、いつ迄も抵抗して居つたのである。爾るにそれに對して友人の方は抵抗せぬ。此方は抵抗てゆくのに一方は飽く迄それを氣に碍へぬ態度で、何時迄も優しく仕て呉れる。すると最後には私この心迄起つたのである。『これ程迄に言つたもの』と、これが言ひ度くてならなかつたのであつた。皆様の中にはこれが有られやうと思ふのである。すると慈悲あるの方は、『君も隨分可笑しな人だ。初めから君が隔てが止まぬから氣の毒といふてゐるのでないか。爾るにそら聞いたら止みさうなものとは君何事か。隔ては君の性だから何れ丈けなりと勝手に隔てゝ居り給へ。此方は何處迄行つても捨てぬと言ふたら捨てぬのだから。』と、茲一つ突放なされて見ると、初めて向ふの思召の程が分つて、抵抗が奪られるとなるのである。それを我々『此方が有難いと受けられゝば、向ふにも喜んで貰へやうに』と、それなら慈悲と言ふても五分々々の慈悲である。

汝に満足して貰ひ度い爲に同情するといふ同情が有るものか。親が子に善くするに、子に有難いと言ふて貰ひ度い爲にする親は無い。今子が難義、罪を犯し、仕やうが無い身だから親が飛び出して來たのである。出た以上は如何に悪しからうが逆らはふが、引き受けたといふた以上は引受けたと、茲一方は初めから何處迄も絶対である。即ちこの絶対の思召であることが一點知らされると、『このやうな自分の方から抵抗を止めて難有いとならぬ、これ程我慢の止まぬ、この者をそれ程に思召し下されたのか難有い』と茲になつて來るのである。即ち他力に於て信仰徹底の結果が『この何處迄も我慢の止まぬ、この仕て見やうの無い者を』と、この機の深信となつて現はれて來るが茲である。

## 二二 『止まいても』に非す『止めを』なり

こは實例に就て言ふと此間も或る方が『何うも私は短氣で可けませぬ。これ程先生の話を聞いたら、いつかは止みさうなもの、少しは取れさうなものと思ひますか』と、斯ういふお話であつた。私『それは誠に結構のお心掛けと言はんなんらんが、併し貴方は私の話を

斯ういふ風に聞いてるのでせう。佛の言はれるのは、短氣は止まぬのだぞ、止まいても見て居るから心配するなど、斯ういふ風に聞いてるのでせう』と申上ると然うといふことである。『すると貴方然う聞いて安心出來さうなもの、然う聞いたら止みさうなものと、然う思うてるのでせう』『そうだ』といふことである。『すると貴方何ちらかといへば止んだ方がよいと思うてるの』『せう』『然うだ』といふことである。私『貴方、佛の慈悲に止まいてもといふ如きをかしながら事があるのか。貴方それ程聞いて止めやうゝと、それに貴方血の涙泣いて居るのであるも、それは止まぬが汝の性なれば、その止まぬが可哀相だとお慈悲なのである。貴方止まぬといつて短氣を出したあとでいつも殘念々々と、そこはちつとは止まぬと仰しやる方のお言葉を聞かなくては可かぬ。短氣でも無い、斯れ程止まぬ短氣の性分故有らゆる人に呆れられる自分を、その故に佛ばかりはその性分を斯程に迄哀み思召す。こゝが親鸞聖人の言はれる真宗の眼目である』と、お話したことをあつた。

## 二三 實際生計と御眞實

悲なのである。故に『たゞ商ひをもし、奉公をもせよ、猶すなどりをもせよ』——そこになると我々が政治、實業、教育、學問、何を仕やうか皆な商ひ、獵すなどりである。我々は學問で飯を喰ひ、教育で飯を喰ひ、宗教で佛を賣つて飯を喰ふ。そういうふ淺間しきことを仕て、もて無い。それせすんば世に活きて行く能はざる淺間しき我々なるとを兼ねて見て下されて、その者を何處々迄もある御慈悲なのである。故に『斯る罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごときのいたづらものをたすけんとちかひまします彌陀如來の本願にてましますぞと深く信じて』——即ちこの仕て見やうの無い御同やうがこの恩召一つて腹ふくれて、各その生計に安んぜさせて費へるとなるのである。

#### 二四 秩序ある人生の眞解決

故にト翁の言ふ如き我々無抵抗に出来ますのは理想生活は我々には出来得ぬのである。ト翁の無抵抗主義は非戦論、最後には財産私有もいかぬ、裁判も罪悪であると、そんなこと人間に出来るもので無い。それが出来得ぬのが人間なのである。故に一寸聞くと大層よいやうであるも、そういうふことが出来ると思ふてゐるのである。

國家の爲めには鉢取りて、戰ふ可きには戰はなくてはならぬ者なのである。そのせねばならぬ淺間しき人間の寄り集りの人生なることを見て下されて、その冷かなる仕て見やうの無い、そこを何處迄も温めてやる、その爲めの我が友情ぞと、この廣大救濟の御眞實なれば、我々この人生生活の上に於て、已むをえぬには敵を殺し、又殺されつゝ、そのものがこの恵み一つで安心させて費へるとなるのである。故に人生總ての組織の上に眞の秩序ある解決を與へる信仰であるのである。

#### 二五 人生々活と信仰

猶ほこは以前から思ふのであるが、このト翁の無抵抗主義が妙なことになると、頗る變な思想になりますせぬかといふことを思ふのである。寧ろこの無抵抗思想丈けに止ると、我々抵抗の罪悪である丈けは分るが、それから人生に眞に踏み出すには、その言うてゐる我々の善なるものが倒れぬ限り出られぬのだから、その結局が變なことになりはせぬかといふことを思ふのである。強ち露國ばかりを言ふので無いが、少くも露西亞があんな具合になつたことが——即ち我

まだ自身の惡しさが認められて居ぬのである。爾るに動もすれば我々そいふ思想に囚はれて、無抵抗に仕やう／＼と、そこになると聖人の言はれたには、我々が煩惱に縛られて苦みて居るばかりが牢獄で無い。善本徳本に囚はれて善い事を仕やう／＼と言うて居るものだから氣を附けなくてはならぬ。それはすべき善の鎖に繫がれて居るものである。善の金の鎖に繫がれて五百歳の間牢獄を出ることが出来ぬのだといふことを言はれてある。故に善いことも牢獄に繫がれて居るのであるが、それがせんと努めれば努める程、彌眞宗には戒なるものが置いて無い。善くするのが結構であるが、せいてもなら無戒といふことは無いのである。全體戒行座禪、我々が善く出来ると思うて居るのが間違ひである。その出來無いそこを見て大悲の心遣る瀬無く、その者に廣大眞實を差向けて下されたが慈悲なれば、我々は戒行修行の出來ざる淺間しき獵すなどり。極言すれば

から進んで戦争を中止し、兵備を解き、飽く迄も形の上では無抵抗的に、首懸じられても何うせられても宜しいといつた態度でやつて、而して一方はそれに乘じて大兵を差向け、城下の盟を爲さしめるが如き形勢を釀し來つたといふことは、形の無抵抗主義が妙な結果を來したとは思はれぬかと申すのである。故に我々は我からする善の立場では一足も、一寸も行かれぬ。寧ろその動くに動かれぬ仕て見やう無さ、冷かさを知召して哀み恩召す如來の御眞實を頂いて、それ一つにその方が満足させて費うた上からは、私が如何に行はふが如何にならうが、自分の我慢でするので無い。その仕やうのなきをお見捨て無き慈悲に安心させて費うた上から、政治、實業、商ひ、獵すなどり、それをせねば立ち行かぬ人生の立場になりてこそ、初めてその上から眞實の人生生活がさせて費へるのである。併し之を或人達の思うて居るやうに何を仕ても許るされるのだと取りてはならぬ。寧ろ許されぬ我々の淺間しさであるその爲に佛は、假令身を諸の苦毒の中に止むとも、我が行精進にし

て忍びて終に悔ひじ。(大無量壽經)  
と、その私である爲に血潮を注ぎ、「血潮を注ぐこと四大海水の如し」それは我々のその淺間しさを哀み見捨て難く思召す御眞實の有りなりなのである。故に他力はこの五劫永劫御苦勞のお心が頂けたが他力の味ひととなるのである。

## 二六 無碍の體現は報土得生ののち

さて斯く頂くと無抵抗は我々に出來無いとてある。出來無い我々の抵抗に、佛の方から盡十方無碍の無抵抗向はれる故、如何な私も終にその思召の程に畏れ入りて、私の内面にその無抵抗が届いて下された時が徹底である。即ち顯はれる念佛はその届いて下された反射である。故に一聲の念佛も我々の方からするのでない、その心即ち他力である。和讃には

信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、

金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり。  
即ち他力眞實のお心が一念に我々の内面に届き、入り充ちて働いて下さるのだから真心徹到である。

信仰の一念に我々が忽ち理想を満足して、思ふさま行へるやうになるのならば、それなら現身成佛である。それは我々の出來得無いこと。故に私の信仰はこの世に在る限りは、我々は罪を造りての生活であると申上げる。けれどもその者を何處々々迄もの御眞實の故に、その者が遺る餘地なく満足安心して過させて貰へる。茲を飽く迄とさぬやうに仕て頂き度いことである。

## 二七 不斷煩惱得涅槃

茲を私は常に借金の壁で申上げる。我々の罪惡は借金のやうなものである。如來の慈悲はその借金で仕方の無いのを哀みて、之を拂ふて下さる眞實の金のやうのものである。之は現に『經』にも  
衆の爲に法藏を開いて、廣く功德の寶を施すことを行ひたす。

と言はれてあつて、我々は冷かなる者、乏しき者、借金持ちである。その借金で仕やうの無いのを哀みて廣く功德の寶藏を開いて、その借金を救ひ、拂ひ、満足せしめて下さるが佛である。これは如何にも妙な喻えてある。最も佛とは何かといふに、我々の冷かなるを温めて呉るゝ

真心徹到するひとは、金剛心なりければ、

三品の懺悔するひと、ひとしと宗師はのべたまふ。我々は眼より血の涙を注ぎ、全身の毛孔より汗を流しての三品の懺悔は出來ざれども、この御眞實を知らされた一念には、それすると等しいと宣ふとてある。又

五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれ。

金剛堅固の信心の、さだまとときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける。

併し先きより私は、その結果が無抵抗になつたとか、出來たとかは一言も申して居らぬ。寧ろ何處迄も抵抗の私に、向ふが飽く迄無抵抗に臨まれる故、終に抵抗の私が頭下げて佛に歸命し奉つたのが信心の姿である。即ちそれが罪惡觀となつて表はれて来る。而してその上からはこの御眞實に計らはれ参らせて、この世畢ると肉體を離れて眞の佛土に参らせて貰ふ。即ち彌陀無抵抗が眞に身に行はせて貰ふやうになれるはその時のことである。その境にゆく迄は信仰頂いても何處迄も我々は罪惡の者である。茲が非常に味ひのある所。

ものが日輪、乏しきを救ふて呉れるものが金持ちである。金持ちが如何に寶が澤山あつても、貧しきを救ふてなければ救ひの金持ちにはならぬ。故に今我々のは我々の仕て見やうなきを救濟の佛である。大慈悲の佛である。衆生を救はんが爲に本願を興し、衆生を救はんが爲に永劫の修行を仕て、佛と顯はれ出て給ひたる、救ひの佛である。故に我々のこの冷か、缺乏を何處迄も見て下さらうとの仰である。故にその佛を聞く一念に如何なる我々の缺乏、借金も必ず満足させらるゝと、斯く言ふと能く青年の方が

信仰頂いた上はもう借金は出來ぬのですか、罪惡はせぬのですかと聞かれる方がある。矢張り借金は際限なく出来るのだとすると、折角今迄の拂うて貰つた詮が無くなるし、出來ぬのだとすると煩惱無いことになつて、茲心配に思はれるのである。こゝは好いとてある。我々は信仰以後は満足ぢや、もう借金は出來なくなつて佛は要らなくなるのかといふに、否矢張り際限なく煩惱は起り、借金は出來るのである。すると出來たらもと通り、駄目になつて仕まふかといふに否、真に私を哀みて借金を引受けて呉れる人が、汝の現在

迄の額は引受け、將來のは知らぬぞと言ふことは無い。眞の救ひのお心は過去未來現在、汝がこの後如何程出來やうと、出來る限り皆な引受けざるとある御眞實である。故に『正信偈』には

能く一念喜愛の心を發しぬれば、煩惱を斷ぜずして

涅槃を得。

『不斷煩惱得涅槃』は、煩惱が止まなくともよいといふ意味では無い。斯く何處迄も止まぬが汝の性分と見たにより、汝が借金の出來る限り過去未來現在、何處迄も皆な引受けたゞ』この絶對の大悲を聞けば、その者がその一念に煩惱を斷ぜずして涅槃を得させて貰はれるとの意味である。故に邪見に聞いてはならぬも、一念信仰に徹すれば、

一年また歲末の時となりました。始終休刊續きにて、だらし無き發行なるに係ばらず、御愛讀下されたことを知りし、お見捨てなき御眞實の許に、その淺間しが恐れ入り安じて、その上からは眞實信順の生活が辿らせ得へるとなるのである。併しながら一步たりとも『悪を仕てもよい』と許容を與へられたる如き思想が雜つたら、非常な間違ひとなるのである。(已上)

■ 何分思はざる私的事情あらばれると、一つは力不足の爲め、思ひばかりにていつも申譯けなきことのみと相成り、雑誌としての充分の働きをあらばし得ぬこと、いつも心苦しく存する處であります。殊に急切にお求めになつてある方には、定めて物足らぬふじく多くあらることと思ひますが、現状としてはこれにて御幸抱下され、幸に全誌仕細に御覽願ひ度く思ひます。信仰問題として重要な所は、廻はりくどき文章の中にも努めて盡くしてある積りですから、お読み下さる方でお骨折り下され、御自身の問題として、實際に引きあて、逐一御心讀下されたら、これでも皆様のお力で此方の力不足を補つて頂ける所もあらうかと自ら慰め居るやうのことあります。何はともあれ發行の不行届き、編輯の不親切、反すくも御わび申上ぐる處であります。(編者)

## 絶對不二の教機

「正信偈講話」(行卷末ヨリ)

近角常觀

### 第二席

#### 一 難易對

一 いつもながらこの求道會に於ては、遠方より態々御來會の方もあり、殊に安心出來ぬ爲め遙々この機會に於てと御上京下されたる方も多數あらること故、何うぞこの會が人數に於て澤山お集り下されると共に深みに於ても御人々、充分お味ひ下さるやうにあり度いと思ふことである。

二 前席に於て申述べたる通り、今日の處は聖人が四十八對を作り、他力念佛の尊き所以を讚仰せられたる處なれば、一應文に就きてその處を御聞きを願はふと思ふ。初に

難易對は前席に於て既に申したるが如く、諸善は六か

しく、念佛は易い。故に難きを捨て、稱え易き名號を以て往生の行として下されたがそれである。

三 こは青年諸君の爲に言ふと、諸君にすると出來得る丈け修養して他と争はぬやうに仕やう、隔てぬやうに仕やうと、理想的にせんとすればする程却つて彌々自分の出來ざることを發見するばかりなのである。理想は高きになる程彌々行き詰まる。行き詰つた者は最早や一步も行くことが出來無い。爾るにその出來無い行き詰りを哀れみ見て下されたが他力易行の念佛と、斯ういふことなのである。

#### 一 哀愍の意義

四 まだ話が細くなるが、いつもお慈悲をいふのに、

『哀愍して下さる』とか『悲憐して下さる』とかいふ風に申上る。聖人が慈悲を言はれるには、殊にこの哀愍悲憐等の文字を用ひておいでになるのであつて、『正信偈』には、

本師源空佛教を明にして、善惡の凡夫人を憐愍せしむ。

善導獨り佛の正意を明にせり、定散と逆惡とを捨衰して

など、

五 この矜哀憐愍の文字で仰せられる『哀はれむ』の味が、我々理想通りに行へるなら感じることが出来えぬのである。俗な話なれども我々兎に角自活して行ける間は、哀みの有難みは分らぬ。成る程有難いには有難いなれども、喰べられる間はそれが一應て本當に哀みの添けなさは分らぬ。處が彌々行き詰りて、自活しやうにも仕方がなくなつた。そこへその仕やうのないのを哀む、汝困るならんと茲で哀れみの有難さは全身に沁み渡るのである。

六 處が常に私共自分の思惑を立てやうとして、『あゝやらう、斯う造らう』に目を着け、或は信仰を得て確

相對的比較對論の意味になると非常な間違ひになるのである。それだと一方からも對抗して、『何だ念佛なんと一方も『つまらなくとも六かしいのては何もならぬ』と、斯く互に争ふ意味になると、それでは絶對である味ひが無くなつて仕まふ。絶對とある時に、善し惡しの争ひがある可き筈は無いのである。

九 これは『歎異鈔』十二章には分りよく

たとひ諸門こぞりて念佛はかひなきひとのためなり、その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のもゝ信すればたずかるよし、けたまはりて信じさらへばさらに上根のひとのためにはいやしくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自余の教法はすぐれたりとも、みづからがためには器量およばざればつとめがたし。われもひとも生死をはなれんことこそ、諸佛の御本意にてあはしませば、御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せば、たれのひとかありてあだをするべきや。云々。

一〇 設ひ念佛は稱え易く、諸行は六つかしくとも、

信的行動をやらうなどと、信仰迄を思惑を通さうの手段にとつて居るのである。

又信者の人は信心を頂て極樂に往かうと、極樂行きの手段に取つて、それだと青年者の信仰が人生實行の手段として着目されてあると同じで、思ふ通りに極樂へ参れやせぬのである。

七 寧ろ私共は極樂へ往けぬ、地獄行き、仕やうの無い、崖より墮ちる、それを哀はれむとの御眞實なのである。私共が思ふさまで頂けぬとすれば地獄へより仕やうの無い、又何程我慢張つて理想で計らうて見ても結局畫餅に畢る、その仕やうの無いそれを憐みて下さるが慈悲なのである。故に難易對はその私の出來無い處を遣る瀬なくのたまふ慈悲に安んぜさせて貰うて、念佛を頂いた味ひを言はれたのである。以下一々の對に就きては數多い故、成る可く簡単に申述べやうと思ふ。

### 三 相對的對論に非す

八 處が茲に間違ひ易きは、何々對とあつて比較對論故、諸善は難い念佛は易いと、之が

中心に忘れてならぬのは、その六づかしいのは誰に六づかしいのか、自分に六づかしいのである。自分の如き智慧無き、心眞實になり難き者には、如何に尊き法はあつても、法は尊くても難いといふは、我々如き罪惡の身には出来ぬといふその『難い』である。故にその仕やうの無い私の歯に合ふやうに大悲の粥の南無阿彌陀佛を下されたのであれば、その粥は人に合ふ合はぬの問題で無い、私の爲めのこの粥である。之に争ひのあるべき筈は無いのである。故に四十八對は念佛諸善の善し惡し、優劣を比較せられたものと思ふたら大間違ひである。既にこのあとの處には『然に本願一乗海を按するに、圓融満足極速無碍絕對不二の教なり。』

如何に悪しからうが、私のその惡しさを救ふて下さる南無阿彌陀佛の恵みなることを頂ければ、この恵み一つが絶對不二、絶對に善し惡しの争ひのある譯けは無いのである。

#### 四 善惡超絕

一 こは今少し『歎異鈔』で申すと、一章に  
爾れば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念佛  
にまさるべき善なきゆゑに。惡をもおそるべからず、  
本願をさまたぐほどの惡なきが故に。

と、こゝ  
善惡を超絶してるのである。南無阿彌陀佛を信せんに  
は他の善など要らぬ。他の善などランプ、電燈のやう  
なものである。ランプ、電燈が如何に明るくても、  
今念佛は夜が明けたのである。夜が明けるとランプ、  
電燈はその光を失ふて仕まふのである。イヤ之は怪し  
からぬ、日輪は日輪、電氣は電氣で、夫れ丈けの働きが  
ある」と、諸行の方は言ふかも知れぬも、事實夜が明け  
ればランプの必要はなくなりて仕まふのである。こは  
日輪ランプの優劣で言ふので無い。夜が明けた者には  
事實にその要が無くなつて仕まふてないかと申すので  
ある。

一二 日輪は如何なる暗き穴藏をも照す、如何なる闇みも日

居るのである。『歎異鈔』など何を言はれてあるかとい  
ふに、結局我々の頭が永劫に善し惡しに縛られて一步  
も出られ無い、それが迷ひの根源であることを言はれ  
てるのである。

一五 あまりに通俗なる話であるも、今も思ひ出す。

私入信前神經銳敏にして、つまらぬことが氣になつた。  
途中で學校の先生に遇ひお辭儀をするも、その時先生  
が横向くか何かして居つて、先生の眼に映つらぬ。も  
一度やつて見ても分つたらしい様子が無い』。あゝ折角  
やつても見て貰へなかつた。彼奴仕無つたと先生悪く  
思つて居らせぬか』と、そんなことまで氣になつたこと  
があつた。先生の方よりいふと、『お前が仕たとて左程  
よいとも思はぬ。一體先生の目に仕たからよい、せぬか  
ら悪いといふことがあるものか、皆んな自分の生徒だ  
もの、そんなことは忘れて居る』と、斯く言はれると  
『あゝ然うだつたか』と  
それで初めて善し惡しを取り上げられて仕まふのであ  
る。

一六 日露戰爭の時に大山大將が、可笑しな話である  
けれども、或時日本軍が大きな大砲を敵に分捕られて、

輪の光を妨げるといふことは無い。故に『惡も恐れ無  
し』と、茲が絶對不二。この五分々々離れた比較對論  
である處が有難いのである。

一三 こは話が少しく思想問題に涉るも、今申す茲の  
味ひが出て來ねば今日  
人生平和の來ることは無いのである。今日世界動亂し  
て獨逸、聯合國、何れも自分の方よい／＼て互に相對的  
に遣り合つて居る。それ可かぬのは言ふ迄も無いが、  
併しそれが救はれるは、  
この相對を超絶した絶對の味ひが開けて來ねば可かぬ  
のである。『誰いかぬ、彼いかぬ』て、互に争つて居る限  
り、それは何時迄も可かぬ。成る程自分の方いかぬ  
かも知れぬも、この仕て見やう無きをお見捨てなきあ  
慈悲一つて自分の方は結構」と、  
茲に満足を得て、喧嘩に取合は無い處が出て來ねばい  
つかぬのである。  
この取り合は無い處の味ひが絶對不二なのである。

#### 五 善し惡しを勘定に入れぬ相手

一四 全體我々の心は常に善し惡して取合ひをやつて

皆なが青くなつて心配仕た。叱られはせぬかと漸く恐  
る／＼その事を報告にゆくと、大將が『へイ、そんな  
大きな大砲を何うして持つて來たのですか』と、方角  
違ひな事を言はれたので、皆んなが初めて氣がらくになつたとやうの話も聞いて居る。

一七 全體我々が善し惡しに屈託するは、相手が善し  
惡しを勘定に入れる人間である。故てあるも、  
善し惡しを勘定に入れぬ相手になると『ア、そうちか、  
そういうふお慈悲なのか』と、即ち我々  
善し惡しの計らひ心が取れるのは、佛の方が善し惡し  
を超絶した御眞實でいて下さるからなのである。處が  
相對はこの善し惡しに縛られて、何時までも言ふて居  
るのが相對である。故に今も念佛、諸善善し惡しの意  
昧にとると大間違ひである。この善し惡しを離れた廣  
大眞實を頂けば、初めて  
我々善し惡しの心を離れて、佛の廣大、圓融、満足、  
極速、無碍、絶對不二の慈悲に入らさせて貰へるとな  
るのである。

#### 六 善惡無差別信仰の危險

一八 すると或人又大かしく取りて「先生、善し悪しの無いことは分りました。すると先生、信仰に入ると、善くても悪くとも同じになるのですな」と。

これは私共學生時代に試験前になりて、先生に一つ茲の處は出さぬやうに決めて貰はふと、先生の許に交渉に行く。先生が『爾らばそこは全部止めて遣らう』と、意外にもすつかり承諾して貰へると、『あゝ、あゝ言うたものゝ、少しほ調べて置いたものを、惜しいことを仕た。こんなことなら今迄善いことするに骨折つたのが損になる』と、それではをかしいで無いかと申すのである。

一九 之は我々善いこと出来れば出来たに縛られ、出来ねば出来ぬで『自分のやうに出来ては』に縛られ、この縛縛から離れられず苦しんで居る所に、今の先生の如く『まけてやらう』その意味に聞くと『その位なら初めからせぬ方がよかつた』兎もするとは是になる。之は動もすると、唯の唯だとか、無條件の救濟だとか、然ういふ言ひ方の中には之があつて、すると信仰が無差別、惡平等に墮ち、信仰の爲めに社會の秩序も立たなくなり、道徳の

根本も立たぬやうになる。斯くなるは眞の慈悲に徹底仕たもので無いからである。

## 七 真假辨別の開顯

二〇 故に茲に對とあるを、相對的に争ふ言葉にとるは可かぬが、爾らば諸善をやる者は諸善、念佛者は念佛で、何も態々結び付けて對論の要が無いやうなもので無いかとそれなら法然聖人が流罪になる迄、諸行諸善では可かぬ專修念佛で無くてはと、斯程迄仰しやつた意味が無くなつて仕まふのである。それだと假令死罪流罪になるともこの本願念佛一つで無くてはと、それ程迄に仰せられた廢立の意味が没却されて仕まふのである。

二一 これは皆さんのが信仰は我慢張らぬがよい、角立てぬがよいと、夫れてやるとすると、何やら自分の本領が無くなつて仕まふやうである。併し立てると我慢張るやうになりて困ると、これになる所であるが、併しその本領が立つて來無くては本當で無いのである。法然上人でも、親鸞聖人でも堅く信ずる處ありて

この専修念佛を説かれたのである上は、何も相對的に他の諸行諸善を迫めはなさら無つたが、併しこの念佛でなくてはならぬとの主張は、何處迄も立てゝおいてになつたのであつた。

## 二二 殊に親鸞聖人は

念佛成佛これ真宗、萬行諸善これ假門、

權實真假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ。

この本願念佛一つを頂くが真宗である。我々が自分で種々なる萬行を修してゆく處の教え、それが出来る我々で無いが、それは假に我々凡夫に同じで佛が説いて下された權假の教えであると。即ち先きの『歎異鈔』で『上根の貴方がたの爲めには結構な教えてあらうも、私の爲にはこの本願眞實で無くては』と、斯う言はれた方は大變優しいやうであるも、そう表はれた聖人の信仰が又次には

聖道權化の方便に、衆生ひさしくとゞまりて、

諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ。

即ち言ふ處の諸善諸行の教えでは辿も救はれやうは有りえぬのであると仰せられ、又

三洹河沙の諸佛の、出世のみもとにありしどき、

## 八 相對の善惡、絕對の善惡

二二 こはも少し分りよく言ふと、初めの善し惡しは自分の考の善し惡しである。『自分は正しい、眞直である、彼は悪い、歪んで居る』と、自分から見て善し惡し言つて居るのである。この自分の、相對の善し惡しになると、善し惡し共に皆な悪い。『歎異鈔』のお言葉には

聖人のおほせには、善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。そのゆへは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどに、しりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもそらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますことこそ、おほせはさふらひしか。

善いと言ふも悪いと言ふも、我々が佛なら眞の善し悪しが分らうも、佛ならぬ我々は、

我必ずしも聖に非ず、彼必しも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、誰か能く定むべけん。(十七憲法)

眞の善し悪しの分りやうは無いのである。

二四 すると茲で我々人間の言つてゐる是非善惡は、皆な勝手を言つてゐるので、殘らずが皆な悪いとなる。茲が要點の一つである。之は是非善惡は我々には本當のことは分らぬの故、結局何ちらでもよいのぢやと、これになつてはならぬのである。そこになると我々の言つてゐる善惡は遺らずが皆な勝手で、皆な悪い。善いといふのも悪いと言ふのも、凡そ我々の口に上り言葉にかかる所、皆な悪い。そこで之は誰の部屋の蠟燭は暗い、誰の部屋の電氣は明いと、

蠟燭と電燈が互に善い悪いやつて居るものであつて、それのあるのはまだ夜の明けぬ間の事である。詰り暗闇のある間丈けの問題なのである。處が一旦夜が明けると、その家全體が一時にガラツと暗みを取り上げらるゝ。そこになると何れも雙方とも暗みであるが、その暗みを照す光、日輪である。先きの先生のお辭儀する、せぬを氣に止めず、哀はれむ先生の無差別の大悲無差別の人格、その光に救はれて始めて我々の相對の善し惡しがとられ、茲は眞に夜が明けるとなるのである。二七、すると夜が明けると、もう我々は何事もせなくともよいのかと。それは今迄の如き相對の善し惡し心では無くなる。寧ろ茲に至りて初めて眞に我々の爲すべき處が明になつて、眞實安心の立場よりさせて貰へるとなるのである。すると肝心はその夜を明けさせ給ふ佛の御眞實の問題となるのである。

## 九 佛の御眞實とは如何

二八 佛の眞實は之を我々の不實と並べて考えるのがよく無いのである。殊に中には我々人間の誠で佛のまことを考えて居る人がある。これではいつ迄たつても分りやうは無いのである。我々人間は眞實に出来得無い迄は分るが、その先きには一步も出

二六 處が何うも茲が半面丈けの思想になりていかぬのである。近頃の思想界は茲何うやりても暗みぢや、本當で無いと、破壊することは遺るも、一向新らしき建設は來ぬやうである。爾らばそれするのはいかぬから、せな／＼と抑える方がよいのか。矢張り型になりて可かぬのである。

二七 處が何うも茲が半面丈けの思想になりていかぬのである。近頃の思想界は茲何うやりても暗みぢや、本當で無いと、破壊することは遺るも、一向新らしき建設は來ぬやうである。爾らばそれするのはいかぬから、せな／＼と抑える方がよいのか。矢張り型になりて可かぬのである。

二九 佛の眞實とは、我々の眞實ならぬを哀れみて、此方が如何な不眞實である。これでは此方の不眞實と佛の眞實との關係が分らぬ。眞實を下さるのだ／＼と言ふ處の意味が立たなくなつて仕まゝのである。

三〇 又しても持ち出してよく無けれども、私など監獄で囚人に教誨する。よく監獄へ參觀に來る人がある。囚人は既に自分が犯罪せりとのことにて、社會に對して非常に氣兼ねして疑ひ深くなつて居る。況や厚き壁にて社會から支え切られて、形からして嚴重なる障壁の中に、誰斯く思ひて居らぬか、彼斯く思ひて居らぬかと、心に有らん限りの障壁を築きてやつて居る。其處へ何心なさ人が參觀に來て、「あゝあれ程に氣兼ね仕て

やつて居るのか、可哀相」と、と囚人に同情した顔付きてても仕て眺めたとする、すると一方は心のひがめる丈けひがんで居る處故、『何んだ、彼奴あんな顔して見やがつた、全體監獄へ見物に来る奴があるものか、人を馬鹿に仕てる』と、そこは彼等は自分等は赤い社會、世間は黒い社會と、我から非常な隔てを作つて眺めて居るから、『又黒い社會の奴が一人やつて來やがつた』と、一方は同情して見て居るのに、何か人種でも違つた奴が來たかのやうに向へたとする。即ち斯ういふ風に出るのが相對であるすると一方は絶対に同情して行かうとするのだけれども、一方がれそ故終に此方の同情の方が向うの障壁の爲に冷やされて、囚人の爲めに却つて此方が感化受け『ひどい奴だ』と、之になつたとすると、之では同情にならぬのである。

三一 すると苟も同情とあれば、向うが氷で來れば、その氷がつめたからうと察するのである。人の同情が理解されぬ、成る程それは無理無い、その境遇に立てば、そく單純にゆくまい。人を疑ふ。成る程あの境遇で障へられたら然うあらう。寧ろそういふ風に人の同情を理解し得られぬ迄に汝の冷却したこと可哀相に

思ふのであると、茲一步でも此方から善く仕て行かねばいかぬとあるのなら、もう救はれぬも、反対に我々の然う行けぬその冷か、疑ひ、闇黒、そこを飽く迄理解して、その者を何處々迄も、如何に疑ふも悪しくは思はぬ、氣にせぬぞと、これが我々の障壁を取り上げて仕まふ處の同情なのである。處て之は我々がそうすると言つたのでは無くて、佛の御眞實を申したのである。

三二 處で此方は中々隔て深いによりて、『向ふはあなたに言はれてもこのやうの心では』と、これ言ふと向うはそれでは可かぬと言はるゝか。否、然ういふ風に疑ふそこを哀れに思ふぞと、要するに之が何か。一方が疑ひ隔て悪しくする程同情する眞實なることは、相手のその不實が氣の毒故、不實で向へば向ふ程その不實を斥けずして、彌々眞實に仕て下さる眞實であるのである。故に如何な冷かな者、疑ひの者も『汝のその氷の有らん限りその氷を見てやるぞ』その温き御眞實の日輪であることに一念氣がつけば、無碍光の利益より、威徳廣大の信をえて、かならず煩惱のこぼりとけ、即ち菩提のみづとなる。

我々人生の善し惡し、善いと言ふも悪いといふも、皆な迷ひである、  
氷の言はせる言である。爾るにその氷をそれ程に迄哀はれみ思召す御眞實の日に遇へば、氷の限り融がされて、南無阿彌陀佛々々々と。即ち之が御眞實を頂いたのである。

三三 故に今日の所に言はれてある對は、この眞實の徹した味ひを示されたのである。即ち徹したと徹せぬとの對故、大違ひである。我々善し惡し、争ひの心がその御眞實の日の爲に救はれた信仰の境界を書かれたのである。それが徹せぬが諸善、徹したが念佛。一方はその御眞實の日輪、一方はランプ電燈と、この意味で今日の處は聞いて頂かなければ可かぬのである。そこで難易對は一方は御眞實故易く、一方は我々には出來えぬ教えの故に難いとなる。

## 一〇 頓漸對等

三四 次に  
頓漸對は今この卓を卓ごと引くり反すのなら、何も彼も一邊にいく。上に在る物を一つ除けるのなら然

ういかぬ。諸善修養は一つ／＼ゆく道である。今御眞實の日輪が來れば一邊に夜が明ける故頓漸對である。  
横堅對は、諸善は三僧祇百大劫の修行を經て佛に成る堅の教えである。爾るに今はこの仕やうの無い我々が、思ひがけなく大悲に照らされて横に超證するの故、横堅對である。次に  
超涉對は、諸善は一步々々宛涉つてゆく處の教である。爾るに今は崖下に墮ち込みて上れぬ我々が、上より卸して下された御眞實の繩の故に、一邊に飛び越える故に超涉對。  
順逆對はこの夜を明けさせて貰うた見地より見れば、此方は佛の仰せに信順するの故順であるが、私が善くやりますの方は御眞實を仇にした逆である。

三五 次に  
大小對、多少對は『阿彌陀經』に

諸善は少善根福德因縁である故に、小であり少であるが、念佛は無上大利の名號である。故に大である、多である。

勝劣對は我々の善はほんの持ち合はせの持薬に過ぎ無いが、念佛は萬德圓備の醍醐の妙樂故勝である。親疎對は眞に親心に夜が明けぬ中は、隔て根性で遠慮して、諸行諸善の氣兼ねをするのだが、一度び親心を知らされて見ると、遣らず隔てを取り上げられて、即ち親である。

### 三六 又

近遠對はこの念佛は一念に即得往生故近いが、諸善は歴劫迂廻て遠い。

深淺對は源信和尚の『横川法語』にも、

信心あされども本願ふかきがゆへに、たのめばかならず往生す。

深き本願の御眞實聞くと、深いにも深い機法二種深信の味ひである。

強弱對は親心で救はれるの故力強いが、相對自力は我々の弱き者が作善て往かんとするの故弱い。

重輕對、廣狹對は、佛の慈悲は重く、廣いが、我々の諸善修養は軽く、狭い。

三七 純雜對は、この慈悲は純一無雜の真心である。一點

し給はぬから、もう退きて見やうが無い。

## 一一 直辨因明對等

### 三九 次に

直辨因明對、これなど殊に有難い。私も平日細いことは調べて居らず、因明は佛教にて理論をいふ學問である。處が直辨は直觀的の意味で、お慈悲は直觀的故、それであらうと思ふて居たのである。それでは余りに奇を好む説になる。これは『往生要集』にある言葉に據られたのだ相て、それは『往生要集』に、名號稱えるのと觀念するとの比較がある。その處の文に

餘行の法は、彼の法の種々の功能を明かに因みて、其の中に自ら往生の事を説く。直に往生の要を辨じて、多く念佛と云ふに如かず、云々。

諸行の法はその法の功德を説く因に、自ら往生が出来ると説いたのであるも、念佛は直に往生の要を辨するとして説かれたのである。これは分りよく言ふと茲に馳走がある。望みあれば喰べてよしといふたのが、因みに説いた方である。處が之は貴方に喰べさせやうと思うて態々こしらえたのだと、斯の方は直辨である。

今念佛はこの直辨の御眞實の故に、如何に隔て深き我々も、畏れ入つてその思召の程に満足させて頂かれるのである。

### 四〇 次には

各號定散對、近頃は定散の文字を世間でも使用するやうになつた。散善は心が散る方で、之は實行的に修養する方である。定善は靜に冥想し、思索する方である。如何に實行的に求めやうが、思想的に觀念仕やうが、定散の自力ではいけぬ。そのいけぬを哀はれみて顯はれ下されたる救ひの眞實の名號である。

理盡非理盡對、念佛は理の限りを盡くされたる萬德圓滿の名號である。諸善は相對有漏の善である。

### 四一 次には

勸無勸對、諸善は數多き諸佛の醫師方の各自の醫藥である。處がその藥では間に合はぬ難病者の我々の爲めに、思ひがけなく阿彌陀如來の絕對妙藥の念佛が顯された。之は總てに利く妙藥故、諸佛の醫師も皆な喜んで同音に讀し、勸進して下さる處の名號である。

無間間對は、無間は間無く廣大の恵みは私に加えて下さる。諸善修養は間がある、すきが出來る。

不斷不斬對は、即ち念佛は『不斷煩惱得涅槃』の御眞實である。處が諸善は斷惑證理の教え故、即ち不斷不斬對である。併し之はその一念に不斷煩惱得涅槃の満足を與へて下さるは、即ち一念に先きの善し惡しの計らひ心を取上げ、三有生死の根本を斷絶して下さるからであるが故に、この點より言ふ時は、諸善ではいつ迄も断れるといふことが無い。故に之は何ちらからでも味はせて頂くことが出来るのである。

四二 次に

相續不續對、念佛は一念に攝取不捨の故に、もう遁げやうにも遁げることが出来ぬ。願力の故に自然に念相續させて貰へるも、諸行はそういかぬ。

無上・有上・對、上下・下々・對は、絕對のお慈悲は無上である。上の上である。諸行では猶ほその上有る、下の下がある。

思不思議對は、この廣大の念佛は我々の計られぬ崖上の境界より繩を卸して下された御眞實である。諸行は下より上にゆくの故、此方の思議でゆくのである、相對凡夫思慮の範圍を出ることが出来ぬ。

四三 次は

因行果德對は、諸善修養は『斯うしたら、あゝ仕たら』と、之で進むの故因行である。今念佛は阿彌陀如來が廣大の證の境界より廣く功德の法藏を開いて、選んで與へて下されたる唯一御眞實の御名なれば、果徳の名號である。又諸善の諸佛には因行の誓願はあるも、その願に伴うてその願を仕遂げて下されたといふ願力成就は顯はれて無い。爾るに阿彌陀佛の名號に願の上に、更にその願に伴うて成就下されたる正覺成就の果徳がある。

自説他説對は、この本願眞實の一一道は、釋尊直ぎくに自説下された自説である。又直ちに大悲招喚の勅命そのものである。爾るに諸善は區々にしてそうで無い。

## 一 二 回不廻向對

四四 次に  
廻不廻向對は、之は『選擇集』にある。外の諸行諸善には、

願はくば此の功德を以て平等に一切に施し、同じく菩提心を發して安樂國に往生せん。

の廻向を附けなくては往生の行にならぬが、南無阿彌陀

陀佛は既に南無阿彌陀佛自身が佛本願の行故、附ける必要が無い。處がそこへ親鸞聖人は著しきことを持つて來て、

南無阿彌陀佛は如來廻向だとのことをお知らせ下されたのである。即ち『和讃』には

眞實信心の稱名は、彌陀廻向の法なれば、

不廻向となづけてぞ、自力の稱念さらはる。

從つて此方よりするのでは無いから、凡夫の方よりは、不廻向だとのことをお知らせ下されたのである。これが廻不廻向對となるのである。

四五 何うも茲らになると聖人の書物の読み方、はどう見ても普通とは違つてある。全體

如來廻向など本來佛教には無い處の思想である。處が聖人になると、今の念佛には廻向が入らぬ、他の諸善には入るといふ丈げでは、問題が不徹底である。それは法然上人の言はれた意味は、念佛は既に佛本願の行故

その上に更に之を廻向して參り度い、それを加える必要は無い、念佛が既に凡夫往生の行なのだから。處が諸善は何處へても向けられるのだから、何處そこへと附

## 一 三 護不護對等

四七 次には

護不護對、念佛には六方諸佛の護念があるが、諸善に

はそれが無い。證不證對、念佛には六方諸佛の證誠があるが、餘行にはそれを聞かぬ。

讀不讚對、釋迦佛も餘行を讚歎し給ふて無い、唯念佛を讚歎したまふてある。

付囑不付囑對、釋尊阿難に付囑するに唯この念佛の法のみを以て仕給ひ、外のをし給ふて無い。

四八 次に了不了教對は、餘行は不了教である、徹底せぬ宗教である。他力は本願の眞實に徹底した教法である。

機堪不堪、對機は我々の心である。如何な淺間しき心の者でも佛の御眞實は、それでは助からぬといふとは無い。その者をこそ救はうとするが本願の心である。故に如何な機でも救うに堪ふるのである。處が不堪は俺のやうなことは堪ふまい、救はれまいと、「唯信鈔」にはこの不堪に對して、

このおもひまことにかしこきににたり。憊慢をあこさず高貴のこころなし。しかばあれども佛の不思議力をうたがふとのがあり。云々。

即ち未だ大悲の眞實を聞かぬからそういうふ思ひが起る

善にはその親心が無い。攝不攝對、攝取不捨はこの念佛の親心の届いた者を攝取する、諸善の者には攝取不捨は無い。

入定聚不入對、この念佛の衆生は一念に攝取不捨の故に、現生に正定聚に入れられて退轉せぬ。

報化對、この私共を救ひ度い廣大御眞實一つから、御成就下された報佛報土である。而してその御眞實を頂いたのが一念徹底であれば、これを頂いた念佛の衆生は報土に参らせて頂く。處が諸善は假門故、假門に止つた者は假士にしか行かれぬ。即ち報化對である。

五一 さて以上四十八通りの對を擧げ來りて、次に

『斯の義斯くの如し、然るに本願一乗海を案するに、

圓融、満足、極速、無碍、絕對不二の教也』

四十八對斯くの如くであるが、要するに斯くいふものゝ、この本願一乗海は、圓融、——圓融は圓く融すてある。即ち我々の心を遣る隅なく融かし、煩悶の暗みを一點の滯りなく晴れさせて下さる。又満足、——一點の缺けめもなく行き渡つて下さる故満足である。又「佛は是れ満足大悲の人なるが故に」とや

のである。故に餘行に止るものは、まだこの御心が知られず、不堪の思ひに迷うて居る、即ち機堪不堪對である。

四九 次に選不選對は、この念佛は選擇本願の念佛である。餘行は選び佛てられた方である。

真假對は先きにもいふ如く、念佛成佛是真宗である。萬行諸善はこれ假門である。

佛滅不滅對、法滅不滅對は、佛滅の後餘教は結局劣ふる時がある。處が念佛の法は、特留此經の教法にして、永劫に劣へる時が無い。

自力他力對、今日では自力他力互角に考えられてあるも、この人生自力で行けぬを救はうとの大悲が他力であつて、他力が顯はれて來た限り、自力では行けなくなつて仕まつて居るのである。

五〇 次には有願無願對、この念佛の粥は之を喰べられぬ病人に喰べさせてとの親心、願心の籠つたものである。處が諸

人の字が有難い。皆な佛、々といふ故却つて分り難い。

私など苦んだ時に友人など非常に親切に言うて呉れた。けれども私はこんなては結局呆れられると思ひ、何うか呆れぬ處の友人が欲しかつた。處が佛はその満足大悲の人であつたのである。

極速、無碍——一念に電の如く、如何にも頓極、頓速である。而も無碍で、如何なる私の罪業にも碍へられることなく、何處迄もその罪業を融し救うて下さる處の。絕對不二の教である、とのお言葉である。

## 一四 明信佛智

五一 さて斯く親鸞聖人が繰返し——言を極めて讚歎なされた思召は、何うもこの廣大御眞實の有難みは、私共晝夜一劫すとも言葉に盡くせぬ。一度びこれが私共淺間しき心中に徹して下さるなり、如何なる暗み、如何なる惱みも、一時に晴れ渡るのであつて、即ち之を明信佛智といふ。如何てせう、皆様そういうふ明かな心になれて居りますか、居りませぬか。青年の方などは

近角のは感情的の信仰など言はるゝも、聖人は明に佛智を信する、智慧が入り満ちて明に照すと仰しやる。そいふ明かなものが各自の心中にあるか無いか、之が結局の大問題なのである。

五三 實は先般も或る信仰深き御老人が、遠方より色々訪ねて来て下されて、實は私などがお話致すべき方で無いのである。それに態々訪ねて来て下されて言はれたには、私に聞き度いのたつた一つ『どうも明信佛智といふことが自分には確り無い。貴氏のはそれが有るやうだからそれを聞かして欲しい』と斯ういふ尋ねて、私これある哉と思つたことであつた。明信佛智は私に暗黒の思ひがあるも、如何なる暗黒の中でも遣る瀬無き慈悲の故に、明に暗の隅々迄も見すかされて、明に夜が明けた心持が無くてはならぬ。

五四 ちと分りよく申述ると、すぐ皆様が明信故、明かになりて、綺麗になりてと思はれる。妙な話を持出しが、一休和尚が京都の五條の橋の所に曲りた松を植えて、『之を眞直に見た者には褒美を遣らう』と立札した。誰の松が初めて中心より満足安心した有様が信仰なのである。

五六 處がこれを誤解してはならぬ。今は流石一休丈けに悟りがあつて善い話であるが、併し悟り丈けにいかぬ處がある。曲つてもよいのだと、これに惡悟り仕てはならぬ。この曲つた儘でとなるのは無い。曲れる仕やうなきをお見捨てない御眞實と、茲を間違えぬやうに仕なくてはならぬ。曲つてる者は曲つてるのが眞直だと、之になると自然主義、放つて置け主義になる。曲つてるものを曲つてると、自分が見たとこに意味があるので無い。佛がそう見て下されたところ、その故にその者が見捨てられぬとの眞實でお向ひ下された處に意味があるのである。一休のは自分が見たごとになりはせぬか。私は佛が見て下されたのである。

五七 さて斯く頂くとの本願一乗海は絶対も絶対、絶対不二の教であると斯く言はれて、次には『亦機に就て對論するに、信疑對、善惡對……豪賤對、明闇對あり、斯の義斯くの如し。然るに一乗海の機を按するに、金剛の信心は絶対不二の機なり。

も曲つた松だから眞直に見るとが出来ぬ。『すると蓮如上人が或者に行つて褒美を貰うて來い、教えてやらう、あれは屈曲した松だと見たのが眞直に見たのだ』と。するとその男が早速に一休の處にそれ言うて行つた。一休和尚は聞くなり『貴様うまく見たな、大方蓮如に教えて貰つて來たのだらう』と、斯く言はれたといふ話があるが、皆様が明信故、馬の目をあくで洗つたやうな、鮮かな心になるのだらうと、斯う思はれるのが間違ひなのである。

五五 寧ろ朝から晩迄屈曲した心、蛇や蝮の淺間しさ悪性の止まぬを、それを遣る瀬無く言うて下さる御親切に夜が明けて、その者が御見捨てなき御眞實に腹一杯満足が出来た、これが明信佛智なのである。即ち曲つた心で心配の無くなつた有様なのである、凡そ松の木ならば曲つたもの、松の木で曲らぬ松の木がある譯けは無い。爾るに多くの方は佛のお慈悲は松の木に曲つてならぬと言はれると、斯ういふ風に聞いてるのである。否反対に松の木なれば性質として曲らずには育てぬ、その仕て見やう無さを哀はれませ給ひ、曲ればこそ飽く迄見捨てられぬの御眞實に夜が明けて、そ

### 知る可し。』

機はこの御眞實を頂いた者、頂いた御同やうが機である。その機に就いて對論するにとて、又十一通りの對を舉げさせられ、信疑對、善惡對……豪賤對、明闇對と、これは總て善い方が念佛の眞實を頂いた者の方に附き、悪い方が諸善の機に附く。その善いが頂いた私の性分が善いので無い。私は曲れる性分であるが、その曲れる私をお見捨てなき大悲に夜を明けさせて貰うた味ひである。今斯ぐ絶対不二の本願大悲に夜を明けさせて貰ふと、それ頂いた私と、御見捨てなき御眞實と、二つ別々にあるので無い。徹底した者が即ちその絶対を頂いた者、故にその者が又絶対不二の機である。私は惡機であるが、その惡機に飽く迄無碍にお見捨て無き慈悲の故に、終にその者に徹到して、その者が念佛者、『念佛者は無碍の一道なり。』永劫に佛の淨土にゆき、眞實の眞證を獲させて貰ふ、その絶対眞實を一念に獲得したその者が又絶対の機であるとの慶びである。(第八回夏季求道會第一日第二席) 次は選擇本願の行信

